

研究ノート

柏井園「歴山王該撒及耶蘇基督」(一八九二年筆)について

今 高 義 也

はじめに

「歴山王該撒及耶蘇基督」(一八九二年七月筆、以下「歴山王」と略記)は、柏井園(一八七〇—一九二〇)二二歳の折に書かれた実質的第一作ともいふべき文章で、『柏井全集』第二卷(警醒社書店、一九二三年、二三三—二五〇頁、以下『全集』二・二三三—二五〇と略記)に「アレキサンダー、シーザー及耶蘇基督」(以下、『全集』版テクスト)と略記)として収められている。『全集』編者の注記によれば、これは「嘗て公にされたことのないもの」で、「この文章が機縁となり、はじめて植村正久氏に知られ、その紹介で東京に出で明治学院に教鞭をとり福音新報に麗筆を揮はるるに至った」(『全集』二・二五〇)とされている。柏井の一生の方向を定めた一文という意味で、伝記的に重要な位置を占めているのと同時に、その内容には文明とキリスト教の関係、世界史と〈撰理の神〉の信仰など、後に『基督教史』(一九一四年)の著者として知られることになる〈史家〉柏井の基本的視座が既に現われており、

その日本プロテスタント史における位置についても検討されてしかるべき文献と考えられるが、管見によればその内容に言及した先行研究は、熊野義孝「柏井園における教養の神学」(『日本キリスト教神学思想史』新教出版社、一九六八年)のみにとどまっている。

本稿では、東京神学大学図書館に保管されている原本(墨書、以下「原本」と略記)に基づき『全集』版テキストを校訂し、その解題を試みる。併せて、この資料の伝記的・思想的意義についても検討する。

一 柏井園の略歴

柏井園は、一八七〇年七月二日、旧土佐藩士の長男として、高知県土佐郡福井村に生まれた。父重宣は板垣退助と共に会津戦争に従軍、祖母も板垣を信奉していたという。幼くして母を失い、継母の実兄であり漢学者の西森真太郎から漢学および文章を学ぶ。一八八三年一月(十三歳)、民権派教員の罷免に抗議して同志生徒と共に県立高知中学校を退校、片岡健吉を校長とする私立高知共立学校に移る。継母との死別からおおよそ一年後の一八八七年六月、日本基督教教会高知教会において米国南長老派宣教師グリナンより受洗。同年十一月、同志社英学校に入学、在学中に歴史学徒たらんと志を立てる(「史学」の教員は浮田和民)。在学中の一八九〇年一月に総長の新島襄が死去、一八九一年四月に卒業して帰郷。母校の共立学校および米国南長老派宣教師の経営する高知英和女学校に英語教師として勤務。一八九二年七月、大挙伝道で高知を訪れた植村正久の請いに応じ「歴山王該撒及耶蘇基督」を草す。これが機縁となり、植村の紹介で翌一八九三年九月に上京、明治学院神学部講師となる(英語と歴史を担当)。併せて『福音新報』の編集にも従事し、自らも寄稿し始める。一九〇三年四月明治学院神学部教授に就任、同年九月に渡米してユニ

オン神学校並にコロンビア大学に学ぶ。一九〇五年四月帰国、明治学院を辞して植村の設立した東京神学社に転じ、教頭職につく。同年の五月から十一月にかけて、植村正久・内村鑑三・小崎弘道と共に「新約聖書改訳会」を組織、同会の書記と下訳（ヨハネ伝）を担当。一九〇六年日本基督教青年会同盟の幹事となり、雑誌『開拓者』を創刊、主筆として二年間編集にあたり、一九〇七年には万国学生基督教青年大会の開催に尽力。一九一一年植村の呼びかけになる雑誌『宗教及び文芸』の創刊に参加。一九一四年五月、同志と共に雑誌『文明評論』を創刊、同年八月には『基督教史』を出版（四四歳）。一九一七年一月、『文明評論』掲載の田川大吉郎「方法を知らぬ民」をめぐり、皇室の尊厳を冒瀆したとして東京地検が告発、柏井も編集者として同年三月「新聞紙法違反」の罪に問われ禁錮二ヶ月執行猶予二年の判決を受ける。その後東京神学社教授・教頭職を辞し、一九一八年日本基督教会千駄ヶ谷教会の主任伝道者、一九一九年四月同教会牧師に就任したが、一九二〇年六月二十五日、白血病により満五十歳を目前に死去した。

二 「歴山王該撒及耶蘇基督」——原本の翻刻による『全集』版テキストの校訂と注釈

《本文の翻刻》 * 『全集』版テキストとの異同は省略。——線——線は原本のまま。【 】内の数字は校訂者が付

した注釈番号を示す。

歴山王該撒及耶蘇基督【①】

大ナル社會ノ変遷ハ必ス大ナル英雄ノ手ヲ仮リテ成ル故ニ若シノ社會ニメ一定ノ法則ニ従ヒ一定の順序ヲ追フテ変遷スルモノトセハ英雄ノナス処モ亦自カラ相関係接續スル処ナキヲ得ス歴史ヲ讀ンテ古今英雄ノ世ニ出テタル跡ヲ察

スルニ其人物事業性向ニ於テ一ナラサル処アルモ猶一種ノ脈絡其中ニ貫通スルアリテ後世其事業ノ帰着スル処ヲ取テ之ヲ見レハ文采燦然トメ一絲乱レサルモノアルヲ見ル今予ガコ、ニ此三人ノ英雄ヲ掲ケ来リ論セントスル処ハ主トメ此点ニアリテ其優劣ノ論ニアラス殊ニ神聖ナル基督ハコレ等鉄血世界ノ英雄ト比較セラルヘキモノニアラス【②】唯予ハ単ニ歴史ノ表面ニ現ハレタル結果ニ付テ論スルノミ

凡ソ英雄ノ事業ヲ知ラント欲スレハ先ツ英雄ノ現ハレタル時勢ヲ知ルヲ要ス今歴山王カ希臘ニ出タル時勢ト該撒カ羅馬ニ出テタル時勢ヲ取テ之ヲ比較スルニ兩者頗ル相類スル処アリ夫レ歴山王時代ノ希臘ハ最早全盛ノ希臘ニアラスベリクリス死メアゼンノ文華漸ク其光ヲ失ヒエバミノンダス死メシーブノ武威遂ニ振ハス国ヲ拳テ沈滞眠レルカ如クデモスシニースカ千古ノ雄辯ヲ以テスルモ猶人心ヲ鼓舞スルニ足ラス此時若シ北方半野蛮人視セラレタルマセドン人此人ヲ出ダスコトナカリセハ當時希臘ノ歴史ハ何等ノ文采モナカリシナラン顧ミテ該撒カ羅馬ニ出テタル時代ヲ察スルニ此時羅馬ノ版圖ハ巖然トメ歐亞弗ノ三大州ニ跨カリ加フルニ詩歌工藝ハ之ヲ希臘ヨリ得来リ昔ニ増メ盛ナルモノアリシト雖トモ羅馬ハ既ニ共和時代ノ羅馬ニアラス富豪権ヲ得テ正義ノ士容レラレスグラツカスハ恨ヲ吞テ斃レケト一ハ世ヲ罵テ死シマリヤス、シルラノ徒白人ヲ殺ス數百国家ヲ以テ党争ノ中ニ埋メ了ラントスコレ該撒時代ノ有様ナリ嗚呼天何ソコノ二大英雄ヲハ兩國全盛ノ時ニ出サスメ衰頽ノ時ニ出タセシヤコノ問題ヲ解釈スルニ當リ希臘羅馬ノ二国力歴史ニ於ケル地位ヲ明ニスルヲ要ス

希臘羅馬カ世界ノ文明ニ對メ負フ処ノ使命ハ人遍ク知ル如ク古代文明ノ精英ヲ湛ヘテ今代文明ノ源ヲ作り出スニアリ【③】希臘ハ其哲学詩歌美術工藝ニ於テ羅馬ハ其軍国政治ノ術ニ於テ各其長処ヲ發達メ之ヲ全世界ニ擴ムルニアリ而メ兩國ノ歴史ヲ見ルニ此使命ヲ果サンカ為ニ此文明ヲ養成センカ為ニ各三個ノ時期ヲ經過スルヲ見ル第一ヲ創業ノ時

代トスグリースノ勇士カ凱歌ヲ奏メツロイ戦争ヨリ帰ルノ時ホーマーカ悲壮ナル史詩ヲ咏シ出スノ時波斯ノ大軍境を
壓シテ来リ三百ノスパルタ人城ヲ枕ニメ斃ル、ノ時アゼン人民カ其都府ヲ灰燼ニ付シ国家ノ存亡ヲサラミスノ一戦ニ
賭シタルノ時コレ希臘創業ノ時代ナリ外ハ隣邦襲来ノ衝ニ當ラサルヲ得ス内ハ王政恢復ノ隱謀ニ備ヘサルヲ得ス之カ
為ニブルータスハ大義親ヲ滅シシナタスハ鋤ヲ擲テ劍ヲ執リホラシヤスハ单身橋ヲ守リ幾多英雄ノ慘愴経営ノ中
ニ共和ノ政ヲ維持シタルハコレ羅馬創業ノ時代ナリ創業ノ艱難終リテ全盛ノ時代来ル固ヨリ全盛ノ時代ト云フモ万事
ニ於テ最高ノ度ニ達シタリト云フニアラス文藝技術ノ如キ其精巧ノ点ニ於テハ第三ノ時期ニ遜ル処ナキニアラス然レ
トモ創業ノ元氣猶社会ニ存シテ腐敗ノ兆候未タ現ハレス国民猶進取力行ノ精神ニ富ミテ沈滞ノ有様ニ陥ラス一国ノ文
明カ最純粹ナル特色ヲ帯ヒ新鮮ナル活氣ヲ蓄フルノ時ハコレ則全盛ノ時代ト云フベク希臘ニ於テハペリクリス時代ト
称スル五十年間羅馬ニ於テハ貴族平民ノ争已ンテヨリカルセーダ戦争ノ終ル迄百余年ノ間ハ正ニ此ノ時期ノ中ニアリ
全盛ノ時代極マリテ衰頽ノ時代ヲ生ス衰頽ノ時代ハ即チ宣傳ノ時代ナリ之ヲ果実ニ譬フルニ其吸取セル精英内ニ充テ
成熟シ熟爛メ將ニ地ニ落チントスルカ如シ落チントスル果実ハ永ク樹上ニ留ムヘキニアラサレトモ其中ニ有スル種子
ハ之ヲ採拾シテ適當ノ地ニ種播キ以テ再生ノ時ヲ待タサルヘカラス希臘羅馬ノ文明ハ方ニ成熟ノ時ヲ過キテ熟爛ノ期
ニ入レリ誰カ此種ヲ採拾メ全世界ニ播クモノソ歴山王該撒ノ大手腕ハコ、ニ用ヒラレタリ【④】
歴山王該撒ハコノ使命ヲ自覺シテ其事業ヲナシタリシヤ予之ヲ知ラス然レトモ兩雄ノナシタル迹ヲ見ルニ決メ戦争ノ
為ニ戦争スルモノニアラス胸中一個ノ規模計畫ノ存スルカ如キヲ見ル彼ノ歴山王カ年十三教ヲ碩学アリストールニ
受ケ文学哲学ノ要旨ニ通シタル如キ桶中書ヲ讀ムノ畸人ダイオヂエネスヲ訪ネタル如キ又陣中ホーマーノ詩卷ヲ携ヘ
タル如キ亦以テ希臘文明ノ宣傳者タルニ不適當ナル人物ニアラサリシヲ見ルニ足ルベシ【⑤】大王カ年二十二派兵ヲ

提ゲテヘレスポンドノ海峡ヲ渡リ亞細亞ノ中原ニ縱横シタル十余年間ノ事業ヲ見ルニ着々此目的ニ向テ進行スルニア
ラサルナシ大王馬蹄ノ至ル処其言語ハ希臘語トナリ其學者ハ希臘ノ哲学ヲ講シ其政治ハ希臘ノ法ニ則リ忽然トメ亞細
亞西半部ニ一個ノヘレニツク帝國ハ建設セラレタリ史家サーウール【⑥】ハ之ヲ論メ曰ク、

歴山王ノ征討ハ亞細亞ノ形勢ヲハ一変セリ大王未ダ亞細亞ニ至ラサルヤ地中海ヨリ印度ニ至ル道此ノ大陸ヲ横断セ
ル幾多ノ山脈ハ兇暴ナル盜族ノ巢窟トナリ波斯国王ノ威力ヲ以テスラ其配下ノ一都府ヨリ他ノ都府ニ幸スルニ當リ
先ツ貢ヲ此等ノ賊徒ニ納メサルヲ得サリシナリ想フニ當時此地ヲ旅行シタルフキニシヤノ商人ヲメ十余年ノ後再ヒ
此地ヲ来往メ事物ノ變遷ヲ目撃シ夫ノアレキサンドリヤカ一朝カク繁榮ナル大都府トナリバビロンカ海港トナリ

ユーフラチーズ印度両河口ノ間ニハ海陸兩路相通シカスピヤン海邊ノ大山林ニ斧声ヲ聞クノ有様ヲ見セシメハ其感
想ハ如何ナルヘキ然レトモコレ唯歴山王カ成就シタル功業ノ小部分ナルノミ【⑦】

天斯人ニ假スニ年ヲ以テセス其ノ建設セントシタル大帝國ノ計畫ハ晝餅ニ歸シタリト雖トモ天ハ此人ノ手ヲ仮リテ無
形ナル智識的帝國ノ建設ヲ成サシメタリ次ニ

該撒ノ事業ヲ觀察スルニ歴山王カ東方ニ向テ希臘文明ノ宣傳者タリシ如ク該撒ハ西方ニ向テ羅馬文明ノ宣傳者タリシ
ナリ今日欧州文明ノ中心タル彼ノテームス河口万橋ノ林立スル所巴厘城外煤烟ノ天ヲ焦ス所ライン河畔葡萄ノ生スル
処文明ノ神ハ誰ノ手ヲ假リテ始メテ其魔力ヲ施シタリシカコノ猛獸ノ王国野蠻人ノ王国ヲ開拓シテ今代文明ノ舞臺ヲ
淨メ出タシタルハ果シテ誰ノ力ノヤ人或ハ該撒カ野心ヲ逞クシ己レノ威福ヲ擅ニセントシタルノ跡アルヲ咎ムレトモ
コレ深ク當時羅馬ノ形勢ヲ明ニセサルモノナリ此時羅馬ノ國民ハ最早協力國ヲ護シタル共和時代ノ國民ニアラスメ分
党權ヲ争フノ國民タリシナリサレハ此時一大手腕ヲ以テコレヲ御スルニアラスンハ羅馬ノ一致ハ到底望ムヘカラス況

シヤ世界ニ向テ羅馬ノ文明ヲ宣傳スルニ於テヲヤ彼ノオーガスタス帝カ三大陸ノ州郡ヲ統一シ東カスピヤン海濱ヨリ西チヅラルタルノ海峡ヲ究メ北ハ北海水山ノ浮フ処ヨリ赤道直下ノ砂漠ニ至ル迄蕭然一律ノ下ニ統御シ而シテ其間ニ生長シタル東方文明希臘文明ヲテ文明ノ三文明ヲハ打テ一丸トナシコ、ニ始メテ世界的ノ文明ヲ作り出タシタルハコレ古今絶無ノ快事ナルカコレ決シテオーガスタスノ經綸ニ出タルニアラス皆是レ乃舅ノ貽謀ニヨラザルナシ其他該撒カ曆法改革ニ於ケル法度ノ制定ニ於ケル建築ノ術ニ於ケル凡ソ羅馬ノ内治ニ関スル功績一々コ、ニ挙クルヲ要セス蓋シ古代文明ノ使命ハ羅馬ヲ俟チテ始メテ全ク羅馬文明ノ使命ハ該撒ヲ待テ始メテ全シ該撒ハ古代文明ノ相集マル処近代文明ノ相分ル、処ノ樞軸ニ立チテコノ潮流ヲ支配シコレカ進路ヲ指導シタルモノナリ誰カ之ヲ以テ天ノ斯文明ノ為ニ下シタル一大英雄ト云ハサランヤ【⑧】

希臘ノ文明ハ歴山王ニヨリテ宣傳セラレ羅馬ノ文明ハ該撒ニヨリ宣傳セラレコノ兩種ノ文明ハローガスタス帝ノ下ニ相合シ一轉メ將ニ世界ニ普及セントス然ラハ世界文明ノ基礎ハコ、ニ至リ既ニ成就シタリトスルカ其完全ト不完全トハ措テ問ハサルモ其含有スヘキ元素ニ於テ最早欠クル処ナキヤ曰否猶精神的ノ元素ヲ要シ道德的ノ力ヲ要ス固ヨリ希臘羅馬ニモ道德ノ教ナキニアラス正人君子ナキニアラス然レトモコレ等ノ道德カ千歳ニ傳ヘ万国ニ及ホシテ其勢力ヲ有スルニ足ルヘキヤ當時社會ノ有様ヲ見ハ之ヲ知ルニ足ラン數百年間ノ戰亂始メテ平キ天下太平ニ歸スルト共ニ士氣漸ク消磨シテ人心懦弱ニ陥リ羅馬ノ市中ニ潜伏シタル奢侈、文弱、不徳ノ風ハ流レテ全世界ニ波及セントス思フニ人心ノ危微ナル此時ヨリ甚シキハアラス抑之ヲ救フヘキ精神的ノ元素ハ何クニ存シ道德的ノ力ハ何クヨリ来ルカ猶太ノ国ハコレカ為ニ存シ耶穌基督ハコレカ為ニ世ニ来レリ夫レ天コノ奇異ナル国民ヲ三大州ノ樞軸ナル地中海辺カナンノ地ニ置キ希臘羅馬ノ二国ト對峙シテ大ナル變遷ト大ナル人物ヲ以テ之ヲ修練教育セシメタル決メ偶然ニアラス其人民

ノ氣風ヲ察スルニ沈痛精深ノ処ハ印度人ニ類シ勤勉倦マサルハ支那人ニ類シ優美ナル詩歌的ノ風ヲ帶フルハ希臘人ニ近ク酷烈ナル勇氣ハアラビヤ人ト相似タリ而メ之ヲ貫クニ宗教ノ元氣ヲ以テシ之ヲ總フルニ上帝ノ律法ヲ以テシ之ヲ整フルニ莊嚴ナル礼典ヲ以テス凡ソ此国ニ生スル政治風俗文学ヨリ建築技術ノ細ニ至ル迄儘ク宗教心ノ烈火中ヨリ陶鑄シ来ラサルナシ源深キカ故ニ其流亦長シ、見ルベシ猶太国亡ヒテコ、ニ二千年其民ハ亡国ノ民トナリテ他国ニ流寓シ足未タ故國ノ土ヲ踐マス目未タ故國ノ山川ヲ見サルモノモ尚一意亡国ノ正朔ヲ奉シ亡国ノ宗教ヲ信シ天ニ向ヒテエルサレム復興ノ日ヲ祈レリ養フ所ナクンハ何ヲ以テ能クコ、ニ至ランヤ然リ而メコノ人民ヲ薰陶メコノ精神ヲ發達セシメタルモノヲ預言者トナス試ニ旧約書ヲ開キテ其ノ人物如何ヲ窺フニ是レ實ニ猶太人中ノ精粹ヲ代表スルモノニメ其熱信、勇氣、徳行、文藻共ニ千歳ニ獨歩スルニ足レリ猶希臘ノ哲學者ヲ他ニ見ルヘカラサル如ク羅馬ノ政治家ヲ他ニ見ルヘカラサル如ク預言者ナルモノハ猶太以外ニ求ムヘカラス然ルニマラカイ死メ以後百年預言者復タ起ラスソロモン ダビデノ王国ハ變メ羅馬ノ藩屬トナリダニエル イザヤノ国ハ變メ「パリサイ」「サドカイ」ノ国トナラントス巍々タル聖花崗石ノ聖殿ハ空ニ聳ユレトモ中ハ盜賊ノ巢商估ノ市トナリ數百ノ學者身ニ佩絰ヲ帶ヒ口ニ聖賢ノ言ヲ誦スレトモ熱心水ヨリモ冷ナリ今ヤ一國文明ハ正ニ熟爛ノ期ニ際セリ此時誰カ能クコノ種ヲ採拾メ世界文明ノ圃中ニ播クモノソ耶蘇基督コ、ニ於テ生ル

予ハ基督ハ単ニコレカ為ニ世ニ出タリト云フニ非ス然レトモ其事業カ猶太ノ文明ニ對シ世界ノ文明ニ對メ有スルノ關係ヨリ之ヲ論スレハ恰モ歴山王該撒カ希臘羅馬ニ於ケル關係ト相同ジク一國衰頽ノ時代ニ生レ其國固有ノ文明ヲ收拾メ之ヲ世界ニ宣傳シタルモノト云ハサルヲ得ス基督出テ猶太國ノ使命始メテ全ク世界ノ文明始メテ堅確ナル基礎ヲ得タリ夫レ三英雄カ宣傳シタル學問、政治、宗教ノ三者ハ近代文明ノ要素ナルカ【⑨】就中宗教ナルモノハコノ文明ヲ

傳播シ保有スル為ニ至要ノ位地ニ立テリ思フニ十九世紀ノ今日ハ依然トメ文明宣傳ノ時代ナリ然レトモ最早劍ヲ以テ
宣傳スルノ時代ニアラス筆舌ヲ以テ之ヲナスノ時ナリ一二英雄ノ手ヲ仮リテ宣傳セラル、ニアラスメ文明世界ノ民ハ
等シクコノ大任ヲ負ヘリ而メコノ平和的宣傳ノ模型ハ基督ニ存ス試ニ見ヨ今日熱天冰地ノ間ニ来往シ兇暴無比ノ野蠻
人ヲ馴致メ文明ノ恩沢ニ浴セシムルモノハ主トメ基督ノ精神ヲ精神トメ基督ノ真理ヲ宣傳スル宗教家ニアラスヤ人天
ヲ畏レ人ヲ愛スルヲ知り始メテ學問ヲ授クベク始メテ政治ヲ施スベク始メテ文明社会ノ人タルヲ得ヘシ彼ノ阿非利加
州若シクハフイジー¹寫ニ於ケル蠻人ノ歴史ハ之ヲ証スルニ足ラン基督教ハ是ニ於テ實ニ十九世紀文明ノ先驅者タリト
云フベシ然レトモ唯ニ新開國ニ於テ然ルノミニアラス彼ノ欧州ノ旧國ニ於テ其社会ノ裏面ニハ種々腐敗ノ分子潜伏ス
ルニ拘ラス猶希臘羅馬ノ如キ沈滯逡巡ノ有様ニ陥ラス其學問政治亦能ク健全ナル歩武ヲ以テ進行スルモノハ職トメ宗
教カ其鞭後者タルノ故ニアラサルナキヲ得ンヤ基督教ハ實ニ世界文明ノ「アルハ」ナリ「ヲメガ」ナリ始ナリ終リナ
リ歴山王該撒モ此ニ至リ其名譽ノ金冠ヲ脱メナザレノ匹夫イエスキリストノ前ニ謝セサルベカラス
然リト雖トモ基督教モ其始メニ於テハ兩英雄ニ負フ処少シトセス抑モ基督教カ猶太ノ一隅ニ起リカク長足ノ進歩ヲナ
シ未タ百年ヲ出テスメ世界ヲ風靡スルニ至リタル者ハ其原因種々アリト雖トモ當時天下ノ形勢大ニ之ヲ助ケタルニヨ
ラスンハアラス第一ニ尤モ利益ヲ與ヘタルハ言語ノ同一ナリシコト是ナリ彼ノ使徒²ボロー³等カ孤身颯零歐亞ノ山川ヲ
跋涉シテ道ヲ説クニ當リ希臘語アラサリセハ恐クハ其事業ノ一半モナシ得サリシナラン此時希臘ヲ中心トメ四方數百
里ノ間希臘語ノ通セサルナク希臘文字ノ用ヒラレサル処ナシ左レハ一タヒ希臘語ヲ以テ説教スレハ十余國ノ民齊シク
之ヲ解シ希臘語ヲ以テ書シタル聖書ハ天下遍ク之ヲ読ムコトヲ得タリシナリ次ニ基督教ノ傳播ニ與テ力アルハ希臘哲
学ナリ抑ソクラテス、ブレト⁴、ゼノ⁵等ノ倫理説暗ニ基督教ノ真理ト符合スル処少シトセス然ルニ當時コノ哲学ハ

希臘ノ本国ニ於テハ微々トメ振ハサルニ拘ラス外国ニ於テハコノ学ヲ研究スル者頗ル増加シ小亜細亞羅馬埃及猶太ノ学者ニメ希臘語ヲ以テ著述ヲナスモノ続々トメ輩出セリ故ニ基督教カ其新教理ヲ掲ケテ天下ノ人心ニ質スニ當リ天下ノ人由テ以テ其可否ヲ論難スル標準ハ淺薄ナル偶像教ニアラスメ高尚ナル希臘ノ哲学ナリシハ基督教ノ為ニ最モ幸ナリシナリ然レモ希臘語ト希臘哲学トヲ廣ク世界ニ普及セシメタルハコレ歴山王征討ノ結果ニアラスヤ又彼ノ基督教徒カ始メテ「キリスチヤン」ノ名称ヲ得タルアンチローケノ都ハ歴山王ニヨリテ建設セラレタルニアラスヤ又基督教カ當時ノ學問ト相合体シテ文明世界ヲ征服スルニ足ルヘキ新利器ヲ得タルアレキサンドリヤハ猶其創立者ノ名ヲ留ムルニ非スヤ知ルヘシ基督教カ歴山王ニ負フ処決メ少小ニアラサルヲフリーマン【⑩】曰ク「アンモン」ノ子「ベラス」ノ崇拜者(「アンモン」ハ埃及ノ偶像神「ベラス」ハアッシリヤノ偶像神ナリ)測ラスモ埃及アッシリヤノ偶像ノ破壊者タルヘキ宗教ニ向テ道ヲ備ヘタリトサレトコノ準備ノ一半ハ尚該撒ノ手ヲ待テリ何トナレハ假令天下ノ諸国カ言語、學問ノ上ニ於テ一致スルモ若シ政治上ノ區別ヲ存シ国境關ヲ閉シ兵ヲ列スルノ時ニ當リ焉ソソ單身他国ニ入り平和ノ福音ヲ宣傳スルヲ得ンヤ殊ニ各国敵愾ノ心熾ナルノ時ニ際シ万国的ノ宗教ヲ説キ国家ノ歴史ト關係淺カラサル偶像教ヲ撲滅スルハ頗ル難事ニ属ス之ヲ譬フルニ幾多ノ小池沼堤坡ヲ隔テ、相接スルカ如シ若シ之ヲ開通メ一泓水トナスニアラスンハ其水ヲ清メ其流ヲ変スルハ到底ナシ得ヘキニアラス然ルニ今ヤ羅馬文明ノ潮流ハ全天下ニ横溢シ国土ノ區別モ宗教ノ區別モ拳テ之ヲ水平線下ニ没シ去リ千里一碧ノ大觀ヲナスノ時基督敵身ノ紅血ヲ此中ニ濺ギ来ル其直ニ全面ニ波及メ社會ノ潮流ヲ染メ出シタル亦恠シムニ足ラス彼ノニーロ ダイヲクレシヤンノ諸帝カ此教ヲ撲滅センカ為ニ流シタル幾多無辜ノ血ハ偶々此色ヲ加ヘ此流レヲ増ス機會トナリタルニ過キス史家【⑪】羅馬国ノ定義ヲ下シテ基督教カ世界ノ多神教ヲ倒メ之ニ代ハラシカ為ニ一時コレ等ノ多神教国ヲ無理ニ集合セシメタル一体ナリト云ヒシ

モ決メ過言ニアラサルナリ

論シテコ、ニ至リ予輩ハ歴史ニ於ケル神ノ撰理ノ妙ナルニ感セスンハアラス夫レ歴山王該撒彼レ何人ソ其心ニ満ツル
処ハ功名ノ念ニメ其手ニ携フル処ハ殺人ノ器ニ過キス然ルニコノ英雄ノ事業カ端ナク世界ノ文明ニ一大進歩ヲ与ヘタ
ルノミナラス将来世ニ来ルベキ無形ナル平和ノ王国ノ為ニ必要ナル基礎ヲ置クニ至リタルヲ見レハ歴史モ亦一個ノ奇
跡ト云ハサルヘカラス「主ノ道ヲ備ヘ其路線ヲ直クセヨ」ト呼ハルモノ豈唯ニバプテスマノ約翰ノミナランヤ世界ノ
二大英雄ト之ニ従フ数千万ノ将士ハ草萊ヲ翦去メコノ平和ノ主ヲ迎ヘタリ予ハ是ニ至テ諸帝ノ帝諸王ノ王ナル聖名モ
終ニ虚称ニアラスメ万軍ノ主エホバハ長ナヘニ權威ヲ有スルヲ知ル

二十五年七月十一日【12】

《注釈》

- 【1】 柏井の歴史意識の形成は、学制が布かれた一八七二年以後十年間学校教育に導入されていた万国史教育にその起点の一つを求めることができる。柏井が繙読したとみられる万国史教科書としては、西村茂樹訳述『万国史略』（一八六九年）〈小学校・中学校〉・パーレー『万国史』（Peter Parlay, 実名 Samuel Griswold Goodrich *Universal History on the Basis of Geography*, M.H. Newman, 1837）〈高知共立学校〉・ギンジー『エローマン文明史』（François Pierre Guillaume Guizot *General History of Civilization in Europe*, D. Appleton, 1867）〈同上〉・須因頓「スウインントン」氏『万国史』植田榮訳 一八八六年、岩本米太郎、酒井清藏（William Swinton *Outlines of the World's History, Ancient, Mediaeval, and Modern. With Special Relation to the History of Civilization and the Progress of Mankind*, Doshisha 1886）〈同志社英学校〉等である（『高知共立学校資料集』〈一九九二年、土佐女子学園〉、「同志社学校一覧」）。

このうちアレクサンダーを「歴山王」と訳しているのはパーレー『万国史』の牧山耕平訳である。スウィントン『万国史』の植田榮訳は「歴山大王」と訳している。ジュリアス・シーザーを「該撒」と訳している万国史教科書は未詳だが、著名なものとしてはシェイクスピア『ジュリアス・シーザー』を翻訳した坪内逍遙『該撒奇談 自由太刀余波鋭鋒』(しいさるきだん じゆうのたちなごりのきれあじ)(一八八四年、東洋館)が知られている。

【②】「英雄」の語からはカーライルの『英雄崇拜論』(原著、一八四一年)が想起されるが、アレクサンダーら「鉄血世界ノ英雄」に「神聖ナル」キリストを対置する柏井は、カーライルの汎神論的英雄観とは意識的に距離をとっているとみられる。礼拝の対象たる「神聖ナル」キリストと政治的君主とは「比較セラルヘキモノニアラス」との言表には、三年前に発布された大日本帝国憲法第三条(「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と、約一年半前に発生した「内村不敬事件」を踏まえたキリスト者としての立場の表明を含んでいるとみられる。

【③】古代ギリシアおよびローマ文明を「十九世紀文明」の淵源とみる文明史観は、一八八〇年代には既に広く移入されていた。柏井が参照した可能性が高い宮川鉄次郎『希臘羅馬史』(一八九〇年二月、博文館、万国歴史全書第六編)冒頭に置かれた天野湛村「為之」による「序」には次のようにある。

上代ニ三名國アリ、曰ク希臘、曰ク羅馬、曰ク猶太、希臘ハ文華ヲ以テ鳴リ羅馬ハ富強ヲ以テ鳴リ、猶太ハ宗教ヲ以テ鳴ル、特ニ希臘羅馬ノ歴史ハ世界ノ歴史ニ関係ヲ有スルヤ大ナリ、蓋シ希臘ノ山高ク水清キ所ニハ今日歐洲ヲ光被スル文明ノ源泉アリ、以太利ノたいばー河畔ニハ、今日ノ歐洲各國ヲ分派セシメタル羅馬國ノ源泉アリ、故ニ第十九世紀文明ノ大源ヲ探リテ其濫觴ヲ廣メ、近代文明國ノ故園ヲ探リテ、其由来ヲ明ラカニセントスルモノハ、必ズ希臘ト羅馬ノ史ヲ緝カザルベカラズ、

なお天野には『万国歴史』(一八八七年、富山房)がある。

【④】創業・全盛・衰頹の三期区分は前掲宮川『希臘羅馬史』のギリシア史にも見え、アレクサンダーが文明の「種子」を「輸送」する役割を果たしたとの見方も同書で次のように述べられている(一二四〜一二五頁)。

「アレクサンダーの」功業中、最も歴史上重要ノ干係ヲ生セシメタルモノハ「へれにすむ」即チ希臘國風ヲ東洋ニ傳播セルコト是レナリ、未開ノ東洋諸國ヲシテ、南歐文明ノ種子ヲ輸入セシメ、之ヨリ東洋文化ノ萌芽ヲ發セシメタルハ、蓋シ大王カ偶然ノ功名ト云フベシ

【⑤】アレクサンダーがアリストテレスに学び、ホーマーの詩を愛唱したことは前掲宮川『希臘羅馬史』一一九頁に記述があるが、「ダイオチエネス」(ディオゲネス)との逸話は後述【⑥】のサールウォール『ギリシア史』にみえる。

【⑥】Connop Thirlwall (1797-1875) は英国の司教・歴史家。大部の主著『ギリシア史』(*The History of Greece*, vol. 1-vol. 8, Newed, London: Longman, Brown, Green and Longmans, 1845-1852) は矢野龍溪(一八五一一一九三二)が『経国美談』(一八八三一一八八四、報知新聞社)の凡例で粉本として挙げている。

【⑦】前掲Thirlwallの『ギリシア史』第七卷「一一〇—一一二頁にみえる次の箇所を柏井が抄訳したものとみられる。

Let any one contemplate the contrast between the state of Asia under Alexander, and the time when Egypt was either in revolt against Persia, or visited by her irritated conquerors with the punishment of repeated insurrection, when almost every part of the great mountain-chain which traverses the length of Asia, from the Mediterranean to the borders of India, was inhabited by fierce, independent, predatory tribes: when the Persian kings themselves were forced to pay tribute before they were allowed to pass from one of their capitals to another. Let any one endeavor to enter into the feelings, with which a Phoenician merchant must have viewed the change that took place in the face of the earth, when the Egyptian Alexandria had begun to receive and pour out an inexhaustible tide of wealth: when Babylon had become a great port.: when a passage was opened both by sea and land between the Euphrates and the Indus: when the forests on the shores of the Caspian had begun to resound with the axe and the hammer. It will then appear that this part of the benefits which flowed from Alexander's conquest cannot be easily exaggerated.

サールウォールの大著からアレクサンダーの功績を総括する章段を抽出した、正確かつ韻律に富む邦訳といえよう。

【⑧】 シーザーの「内治ニ関スル功績」については前掲植田榮訳スウィントン『万国史』二四二―二四三頁に具体的な記述がみられる。

【⑨】 学問・政治・宗教という文明の三要素の淵源を、それぞれギリシア・ローマ・ユダヤに求める見方は【③】宮川前掲書の「序」参照。

【⑩】 Freeman, Edward Augustus (1823-1892) は英国の歴史家。万国史教科書として *General Sketch of History* (Freeman's Historical Course for schools New York: Henry Holt 1874) の関藤成緒訳『弗氏万国史要』(一八八八年、久米堂)がある。柏井が翻訳し引用している『アンモン』ノ子『ペラス』ノ崇拜者：道ヲ備ヘタリ」の出典は、史論集 *Historical Essays, second series*, London: Macmillan And Co. 1880 p. 226 (第五章「アレクサンダー大王」Alexander the Great) にみえる次の一節とみられる。

The son of Ammon, the worshipper of Belus, made ready the path for the faith which should overthrow the idols of Egypt and Assyria.

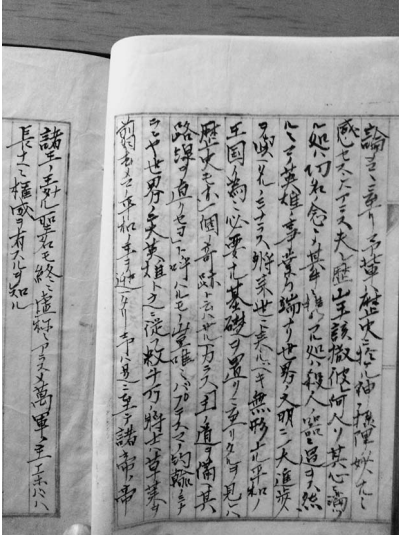
【⑪】 なお柏井の〈引用〉には、原文にはない「測ラスモ」が挿入されている。

【⑫】 この「史家」については未詳。

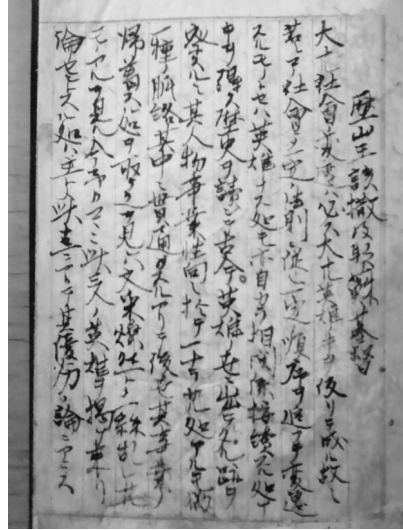
【⑬】 『明治』二五(一八九二)年七月十一日。脱稿した日付とみられる。植村が高知に到着したのは同年七月三日の日曜日で、植村はこの日から三夜続けて高知教会で伝道説教をし、二百〜三百の聴衆があった(『福音新報』第七三号、一八九二年八月五日)。説教題は四日が「宗教の永続」、五日が「神の子イエスキリスト」であった(馬場孤蝶「閑中日記」一八九二年五月一日―一八九三年一月八日、『明治学院史資料集』第一四集、明治学院大学図書館、一九八七年二月)。柏井との出会いは、この間にあったものと推定される。植村は七月二九日に高知丸で帰京の途につくが、見送りにきた人々の中に柏井の姿が確認されている(同前)。

柏井園「歴山王該撒及耶蘇基督」原本（東京神学大学図書館所蔵）

終結部分



冒頭部分



柏井園「歴山王該撒及耶蘇基督」（一八九二年筆）について

末尾にある脱稿日

〔明治〕二十五年七月十一日



三 解 題

1 先行研究

大内三郎

「歴山王」が草された事情については、植村との関わりを調査した大内三郎が次のように述べている(傍線は引用者、以下同じ)。

一方植村の動静をみると、一八九二年から九三年にかけて高知は東京より遠く且つ交通の不便なところであるにもかかわらず三回もみえている。一八九二年六月二九日単身で、一二月二九日にはナックス〔岩本善治〕と、翌九三年七月二八日には高知教会牧師に推薦せる多田素を連れてやってきている。(中略) 子息柏井光蔵氏談によると、植村が若い柏井にむかって「君は文章が書けるか」と尋ねた。その時のやり取りの結果であろう植村より求められるままに植村の滞在中一文を草して植村にさし出した。それが前記第二回かそれとも一八九六〔三〕年七月二八日にナックス〔多田素〕とともに来た第三回目かはっきりしないが、柏井が六月女学校を辞任しているところから七月とみてよい。その右の一文とは「アレキサンダー・シーザー・及び耶蘇基督」(『柏井全集第二巻』所収)で、偶々米国に留学することになった明治学院の石本三十郎教授の後任に推薦された。

(大内三郎「植村正久と柏井園」『植村正久年表』から(一)——『山梨英和短期大学紀要』一五号、一九八

一年)

柏井が「歴山王」を草して植村にさし出したのが、高知伝道の第二回目か三回目か「はっきりしない」と大内は述べているが、原本の末尾にある脱稿日を示す日付から、第一回目の時であったことがわかる。植村の高知着が七月三日、脱稿日が同月十一日であることから、柏井はこれを一週間足らずで書き上げたものと推定される。同月二十九日、高知を発つ植村と見送りに来た柏井との間にどのような話が交わされたかは、さだかではない【12】。

熊野義孝

「歴山王」の内容に言及した先行研究は、前述したように熊野義孝の柏井論のみであろう。熊野はそこで次のように述べている。

この文章はかつて公表されたことがなかったと言われるけれども、内容表現共に成熟している。(中略)その史観を貫くものは、世の変遷における「英雄」の役割を認めながら、彼らを介して進展するところの「何者」かに懸けられている。(中略)そして最後に、歴史を導いてイエスの出現を準備させた神の配剤を讚美して筆を擱いている。まことに二十二歳の青年、しかも明治憲法発布の頃の文章として、珍重するに足るであろう。／＼もとも歴史に対する興味関心は柏井園の生涯変わることはない知的活動の源泉であったが、その旺盛な歴史意識は彼を歴史的考証家や文献学者の方向に導くかわりに、史的評論を介してむしろ実践的な境域へと不断に目を向け

させたようである。歴史はそこにあつて人間が己を安息させる場所ではなく、かえつてその転変に應じて人生の秘儀を学び、より高い世界への理想を燃え立たせる機会として捉えられる。

(熊野「柏井園における教養の神学」『日本キリスト教神学思想史』、新教出版社、一九六八年、三〇〇、三〇二頁)

熊野は柏井の最初期に属するこの文章を、その生涯を貫く歴史意識の萌芽を示す「内容表現共に成熟」した文章として、同時代において「珍重するに足る」と評価している。ただ熊野の言及は基本的には内容の要約と紹介にとどまっております。踏み込んだ分析と検討はなされていません。また同時代状況としては、「明治憲法発布の頃」であるとともに、一八九二年七月という脱稿の時日を踏まえるならば「教育勅語の渙発とその後の内村鑑三不敬事件から一年余りが経過した頃」と捉えてこの文章を検討する必要もあるのではないかと考える。

以下、『全集』版を校訂した資料に基づき概要を確認した上で、「歴山王」を草するにあたって柏井が参照・引用したとみられる文献を踏まえつつ、柏井の史観と信仰的陳述の特質と、その思想的意義について検討してみたい。

2 「歴山王該撒及耶蘇基督」の概要

序論

冒頭柏井は次のように述べて、論説全体のねらいと方針を明らかにしている。

大ナル社會ノ變遷ハ必ス大ナル英雄ノ手ヲ俵リテ成ル故ニ若シコノ社會ニメ一定ノ法則ニ從ヒ一定ノ順序ヲ追フテ變遷スルモノトセハ英雄ノナス処モ亦自カラ相關係接續スル処ナキヲ得ス歴史ヲ讀シテ古今英雄ノ世ニ出テタル跡ヲ察スルニ其人物事業性向ニ於テ一ナラサル処アルモ猶一種ノ脈絡其中ニ貫通スルアリテ後世其事業ノ帰着スル処ヲ取テ之ヲ見レハ文采燦然トメ一絲亂レサルモノアルヲ見ル今予ガコ、ニ此三人ノ英雄ヲ掲ケ來リ論セントスル処ハ主トメ此点ニアリテ其優劣ノ論ニアラス殊ニ神聖ナル基督ハコレ等鉄血世界ノ英雄ト比較セラルヘキモノニアラス唯予ハ単ニ歴史ノ表面ニ現ハレタル結果ニ付テ論スルノミ

歴史において「大ナル社會ノ變遷」に関わった三人の「大ナル英雄」——アレクサンダー、シーザー、イエス・キリスト、この「人物事業性向」において異なる三人が成した事業には、「後世」からその「帰着スル処」を見ると、「一種ノ脈絡」が「貫通」しているが見出される。その「脈絡」を見極めることこそが論説の主題である。もとより宗教的礼拝の対象、「神聖」なるイエス・キリストは、「鉄血世界」の〈帝王〉たるアレクサンダーやシーザーとは比較を絶した存在ではある。しかしここではかような原理的な問題は措き、あくまで「歴史ノ表面ニ現ハレタ結果」——〈歴史的事実〉について論じる、というのである。以下、柏井の論述を要約する。

英雄出現の「時勢」

英雄の事業の性格を明らかにしようとするなら、その英雄が出現した「時勢」に注目する必要がある。アレクサンダー、シーザーが現れた「時勢」はともにギリシア、ローマの全盛期ではなく、衰退期であった。「嗚呼天何ソコノ

二大英雄ヲハ兩國全盛ノ時ニ出サスメ衰頽ノ時ニ出タセシヤ?この問題を正しく解釈するには、まずギリシア、ローマそれぞれの「歴史ニ於ケル地位」を明らかにしなければならぬ。

ギリシア・ローマの「歴史ニ於ケル地位」

ギリシア・ローマが世界の文明に対して負った「歴史ニ於ケル地位」、すなわち世界的「使命」は、「古代文明ノ精英ヲ湛ヘテ近代文明ノ源ヲ作り出ス」ことであつた。具体的には、ギリシアは「哲学詩歌美術工藝」において、ローマは「軍国政治ノ術」において、それぞれの「長所」を發達させ、それを全世界に広めることである。それぞれの国は「創業」「全盛」の時代を経、やがて「衰頽」の時期を迎えるが、この「衰頽」の時代は、形成された文明の「精英」を他に「宣傳」する時代であり、アレクサンダーやシーザーはその「宣傳」の役割を担つたのである。柏井はこれを、「熟爛」した果実の「種子」の比喻を用いて次のように述べている。

衰頽ノ時代ハ即チ宣傳ノ時代ナリ之ヲ果実ニ譬フルニ其吸収セル精英内ニ充チ成熟シ熟爛メ將ニ地ニ落チントスルカ如シ落チントスル果実ハ永ク樹上ニ留ムヘキニアラサレトモ其中ニ有スル種子ハ之ヲ採拾シテ適當ノ地ニ種播キ以テ再生ノ時ヲ待タサルヘカラス希臘羅馬ノ文明ハ方ニ成熟ノ時ヲ過キテ熟爛ノ期ニ入レリ誰カ此種ヲ採拾メ全世界ニ播クモノソ歴山王該撒ノ大手腕ハコ、ニ用ヒラレタリ

アレクサンダーによるギリシア文明の「宣傳」

アレクサンダーに「希臘文明ノ宣傳者」としての自覚があったかどうかは分からないが、事実その遠征によって「至ル処其言語ハ希臘語トナリ其学者ハ希臘ノ哲学ヲ講シ其政治ハ希臘ノ法ニ則リ忽然トメ亜細亞西半部ニ一個ノヘレニツク帝国」が出現することになった。アレクサンダーが企図した「大帝国」は自身の早い死によって画餅に帰したが、「無形ナル智識的帝国ノ建設」は成し遂げられたのである。

シーザーによるローマ文明の「宣傳」

アレクサンダーが東方へのギリシア文明の「宣傳者」であったとするならば、シーザーは西方へのローマ文明の「宣傳者」であった。「分党権ヲ争フノ国民」を優れた指導力で統御して「羅馬ノ一致」を堅持し、曆法・法度・建築等を整備できたのはシーザーの手腕によるものであり、その結果、皇帝アウグストの時代に至って「三大陸ノ州郡ヲ統一シ東カスピヤン海濱ヨリ西デブラタルノ海峡ヲ究メ北ハ北海氷山ノ浮フ処ヨリ赤道直下ノ砂漠ニ至ル迄蕭然一律ノ下ニ統御シ而メ其間ニ生長シタル東方文明希臘文明ラテン文明ノ三文明ヲハ打テ一丸トナシコ、ニ始メテ世界的ノ文明ヲ作り出タ」すこととなった。それが今日の欧州文明の基となったのである。

キリスト誕生の「時勢」

かくしてアウグスト帝のもとでギリシア文明とローマ文明は融合し、「十九世紀文明」の淵源たる古代「世界文明」が現出することとなったが、その基礎が完成するにはなお「精神的ノ元素」「道德的ノ力」を要した。当時のローマ

は「数百年間ノ戦乱始メテ平キ天下太平ニ帰スルト共ニ士氣漸ク消磨シテ人心懦弱ニ陥リ羅馬ノ市中ニ潜伏シタル奢侈、文弱、不徳ノ風ハ流レテ全世界ニ波及セント」していた。この「人心ノ危微」を救う歴史的使命を帯びたのが、宗教をもつて鳴る「猶太ノ国」であつた。

夫レ天コノ奇異ナル国民ヲ三大州ノ枢軸ナル地中海^{カナン}ノ地ニ置キ希臘羅馬ノ二国ト對峙シテ大ナル變遷ト大ナル人物ヲ以テ之ヲ修練教育セシメタル決メ偶然ニアラス(中略)而メ之ヲ貫クニ宗教ノ元氣ヲ以テシ之ヲ総フルニ上帝ノ律法ヲ以テシ之ヲ整フルニ莊嚴ナル礼典ヲ以テス凡ソ此国ニ生スル政治風俗文学ヨリ建築技術ノ細ニ至ル迄儘ク宗教心ノ烈火中ヨリ陶鑄シ来ラサルナシ(中略)然リ而メコノ人民ヲ薰陶メコノ精神ヲ發達セシメタルモノヲ預言者トナス試ニ旧約書ヲ開キテ其ノ人物如何ヲ窺フニ是レ實ニ猶太人中ノ精粹ヲ代表スルモノニメ其熱信、勇氣、徳行、文藻共ニ千歳ニ獨歩スルニ足レリ猶希臘ノ哲學者ヲ他ニ見ルヘカラサル如ク羅馬ノ政治家ヲ他ニ見ルヘカラサル如ク預言者ナルモノハ猶太以外ニ求ムヘカラス

しかしこの「猶太ノ国」も当時は「衰頽」の時期に入っており、マラキの後は預言者が出ず、ローマの属国となつて「一国文明ハ正ニ熟爛ノ期ニ際」していた。この時にあたり、ユダヤ文明の「種子」を「世界文明ノ圃中ニ播ク」使命を帯びて現われたのが三人目の「英雄」、イエス・キリストであつた。

文明史におけるキリスト教の意義

キリストは単にこのために世に現れたわけではないが、そのなした「事業」がユダヤの文明と「世界文明」に対して結果的に有した関係からいえば、アレクサンダーやシーザーと同じく「一国衰頹ノ時代ニ生レ其国固有ノ文明ヲ收拾メ之ヲ世界ニ宣傳」するという使命を果したといわざるを得ない。「三英雄」がそれぞれ「宣傳」した学問・政治・宗教は「近代文明の要素」だが、中でも宗教は「文明ヲ傳播シ保有スル為ニ至要ノ位地」にある。それは「十九世紀ノ今日」においても変わらない。

思フニ十九世紀ノ今日ハ依然トメ文明宣傳ノ時代ナリ然レトモ最早剣ヲ以テ宣傳スルノ時代ニアラス筆舌ヲ以テ之ヲナスノ時ナリ一二英雄ノ手ヲ仮リテ宣傳セラル、ニアラスメ文明世界ノ民ハ等シクコノ大任ヲ負ヘリ而メコノ平和的宣傳ノ模型ハ基督ニ存ス試ニ見ヨ今日熱天冰地ノ間ニ来往シ兇暴無比ノ野蛮人ヲ馴致メ文明ノ恩沢ニ浴セシムルモノハ主トメ基督ノ精神トメ基督ノ真理ヲ宣傳スル宗教家ニアラスヤ人天ヲ畏レ人ヲ愛スルヲ知リ始メテ学問ヲ授クベク始メテ政治ヲ施スベク始メテ文明社会ノ人タルヲ得ヘシ

キリストは文明の「平和的宣傳ノ模型」であり、キリスト教は「剣ヲ以テ宣傳スルノ時代ニアラス筆舌ヲ以テ之ヲナスノ時」たる「十九世紀文明ノ先駆者」である。人は「天ヲ畏レ人ヲ愛スルヲ知り始メテ学問ヲ授クベク始メテ政治ヲ施スベク始メテ文明社会ノ人タルヲ得」る。今日の欧州諸国が「希臘羅馬ノ如キ沈滞逡巡ノ有様ニ陥ラス其学問政治亦能ク健全ナル歩武ヲ以テ進行スル」のも、キリスト教が文明の「鞭後者」として存在してきたからである。

キリスト教伝播におけるアレクサンダーの意義

他方、「猶太ノ一隅」に生れたキリスト教がその初期において急速な拡大を遂げたのにはギリシア語が普及してゐたことが大きい。「此時希臘ヲ中心トメ四方数百里ノ間希臘語ノ通セサルナク希臘文字ノ用ヒラレサル処ナシ左レハ一タヒ希臘語ヲ以テ説教スレハ十余国ノ民齊シク之ヲ解シ希臘語ヲ以テ書シタル聖書ハ天下遍ク之ヲ読ムコトヲ得タリシナリ」。同じくギリシア哲学が、「基督教カ其新教理ヲ掲ケテ天下ノ人心ニ質スニ當リ天下ノ人由テ以テ其可否ヲ論難スル標準」となつたのは、キリスト教教理の学問的發展にとり幸いであつた。「コノ希臘語ト希臘哲学トヲ廣ク世界ニ普及セシメタルハコレ歴山王征討ノ結果ニアラスヤ」。アレクサンダーの遠征がもたらした「一個ノヘレニツク帝国」は、結果的に、キリスト教拡大のために大きな役割を果たした。

キリスト教伝播におけるシーザーの意義

しかし世界が言語と学問においてへ一つになつていたとしても国家間の政治的軍事的対立が存在してゐたならば、宣教の拡大は困難であつた。しかしシーザーの事業によつて種々の国と地域はローマ帝国の政治制度の下にへ一つとせられ、宣教の障害となる政治的・宗教的「境界」は既に取り除かれていた。

之ヲ譬フルニ幾多ノ小池沼堤坡ヲ隔テ、相接スルカ如シ若シ之ヲ開通メ一泓水トナスニアラスンハ其水ヲ清メ其流ヲ変スルハ到底ナシ得ヘキニアラス然ルニ今ヤ羅馬文明ノ潮流ハ全天下ニ横溢シ国土ノ区別モ宗教ノ区別モ拳テ之ヲ水平線下ニ没シ去リ千里一碧ノ大観ヲナスノ時基督献身ノ紅血ヲ此中ニ濺ギ来ル其直ニ全面ニ波及メ社

會ノ潮流ヲ染メ出シタル亦恠シムニ足ラス彼ノニーロ　ダイヲクレシヤンノ諸帝カ此教ヲ撲滅センカ為ニ流シタル幾多無辜ノ血ハ偶々此色ヲ加ヘ此流レヲ増ス機會トナリタルニ過キス

かくしてキリスト教は「未タ百年ヲ出テスメ世界ヲ風靡スルニ至」った。

妙なる「神ノ撰理」——「奇跡」としての歴史

以上のように三人の「英雄」のなした事業の歴史を叙述し來った柏井は、総括して次のように結んでいる。

論シテコ、ニ至リ予輩ハ歴史ニ於ケル神ノ撰理ノ妙ナルニ感セスンハアラス夫レ歴山王該撒彼レ何人ソ其心ニ滿ツル処ハ功名ノ念ニメ其手ニ携フル処ハ殺人ノ器ニ過キス然ルニコノ英雄ノ事業カ端ナク世界ノ文明ニ一大進歩ヲ与ヘタルノミナラス將來世ニ來ルベキ無形ナル平和ノ王国ノ為ニ必要ナル基礎ヲ置クニ至リタルヲ見レハ歴史モ亦一個ノ奇跡ト云ハサルヘカラス「主ノ道ヲ備ヘ其路線ヲ直クセヨ」ト呼ハルモノ豈唯ニバプテスマノ約翰ノミナランヤ世界ノ二大英雄ト之ニ從フ數千万ノ將士ハ草萊ヲ翦去メコノ平和ノ主ヲ迎ヘタリ予ハ是ニ至テ諸帝ノ帝諸王ノ王ナル聖名モ終ニ虚称ニアラスメ万軍ノ主エホバハ長ナヘニ權威ヲ有スルヲ知ル

3 伝記的・思想史的意義

文明史観の受容

柏井が学んだ諸学校の「万国史」教科書は【①】に列挙した通りである。西村『万国史略』・パーレー『万国史』は、「万国史」の名の通り全世界諸地域の動きをまんべんなく追うものであるが、高知共立学校でその英訳が教科書として使用されていたギゾーの『ヨーロッパ文明史』や同志社英学校で学んだスウィントン『万国史』はいわゆる〈文明史〉であって、基本的にはヨーロッパを「文明」発祥の地と捉え、その〈進歩発展〉の歴史を辿るものであった。柏井が引用しているサルウォール【⑥】【⑦】フリーマン【⑩】も同様である。「歴山王」の主たる参考文献とみられる宮川鉄次郎『希臘羅馬史』も、ヨーロッパ文明の淵源を古代ギリシア・ローマに求め、その発展史の〈頂点〉が「十九世紀文明」であるとの立場に貫かれた文明史に他ならない【③】。

「歴山王」が、基本的にはこの文明史の史観を受容し叙述されていることは疑いを容れない。高知で入信した柏井にとって、「自由民権」の獲得もまた「文明の恩沢」にはかならず、文明の〈進展〉そのものに含まれる〈善果〉は疑うべくもなかった。

文明の要素としての宗教

しかし他方、文明史が「鉄血」——戦争と蛮行——の歴史を伴うこともまた事実であり、アレクサンダーやシーザーもまさに「鉄血世界の英雄」として登場する。かような文明史の〈負の側面〉に対して柏井は、「平和」の宗教として

のキリスト教を対置し、その役割を指し示す。キリスト教は人をして「天ヲ畏レ人ヲ愛スルヲ知」らしめる宗教であるから、キリスト教によって人は「始メテ：文明社会ノ人タルヲ得」る、という。柏井によれば「学問」「政治」「宗教」は文明の三要素であって、なかんずく「宗教」は「文明ヲ傳播シ保有スル為ニ至要ノ位地」を占める。キリスト者は「文明世界ノ民」の一員として、「剣」ではなく「筆舌」という平和的手段により「世界文明」を進展せしめる「大任」を負っている、というのである。ここには、のちに創刊した『文明評論』第一号の巻頭言で表明された「志」に通じるものを読み取ることができよう。

微力なる我等の手に成れる一小雑誌、固より之を以て大なる勢力となし得べしと思はず。ただ自己の天分と所に忠実にして謙て勉めんと欲するのみ。然かも『文明評論』の名其一端を示す如く、絶東の我が愛する郷国に清美純潔なる基督教文明を建設するはこれ我等の夢なり、インスピレーションなり。

「我等の志を述べ」『文明評論』第一巻第一号、一九一四年五月四日、署名「文明評論社同人」（推定柏井）。

神の摂理と文明

他方、「鉄血世界の英雄」アレクサンダーとシーザーの「心ニ満ツル処ハ功名ノ念ニメ其手ニ携フル処ハ殺人ノ器ニ過キ」なかったにもかかわらず、彼らの事業が「端ナク」世界文明に一大進歩をもたらしたのみならず、「世ニ来ルベキ無形ナル平和ノ王国」の拡大のために必要な「基礎」を供することとなった。「英雄」たちが闘争を繰り返す「鉄血」の歴史が、キリストにある「平和ノ王国」のために〈奉仕〉せしめられたという〈事実〉は、「神ノ摂理」

——神の〈世界統治〉が真実であることを示している。それは、人の目にはしばしば隠された〈秘儀〉であり理解を超えた「奇跡」以外のものではないが、この「奇跡」によって「諸帝ノ帝諸王ノ王ナル聖名モ終ニ虚称ニアラスメ万軍ノ主エホバハ長ナヘニ權威ヲ有スルヲ知ル」として、〈歴史の主〉なる神を称え、「歴山王」は結ばれている。

「歴山王」が書かれた一八九二年七月は、明治政府が天皇を中心とした国家体制の建設を推進するなか発生した「内村鑑三不敬事件」(一八九一年一月)を受け、キリスト者は一方でキリストこそ「諸帝ノ帝諸王ノ王ナル」唯一の礼拝対象であるとの〈告白〉を問われ、他方で文明史の〈頂点〉たる「十九世紀文明」の中で自らをどのように位置づけるかが問われていた。そのような中、歴史における「神ノ摂理」への信仰に支えられたこのような〈文明批評〉を——植村に提出された非公開の文書とはいえ——柏井が書き上げていたことは、その〈史家〉としての同時代状況への洞察を示すものであり、日本プロテスタント思想史において記憶されるべき〈出来事〉と云ってよいのではなからうか。

おわりに

「歴山王該撒及耶蘇基督」は、一八八〇年代以降盛んに移入されてきていた英米の史家の歴史叙述に見られる文明史観を受容しつつものされたが、それは単なる古代史論にとどまるものではなく、その文明史を含む古代史——古代ギリシア史及びローマ史——が、「鉄血世界」の「英雄」たちの意図にかかわらず、キリストの「無形の平和の王国」拡大のために〈奉仕〉せしめられた「神ノ摂理」の「妙」を看取する〈信仰的陳述〉であった。ただしそこには、依然「鉄血」が力をふるう「十九世紀文明」にあってなお、見えざる神の世界統治を信ずる信仰の〈告白〉と、来るべ

き「無形の平和の王国」のために「筆舌」をもって闘う〈覚悟〉が込められていた。

高知教会の無名の一青年信徒・柏井園から提出されたこの奇異な表題をもつ論説を、植村が驚嘆しつつ読んだことは、想像に難くない。柏井はこの一文によって植村に見出され上京、明治学院で教壇に立つ傍ら勉学を継続する環境を得、ここに独自の「教養の神学」がその形成を始めることとなったのである。

〔付記〕 本稿は、二〇一五年二月二日に明治学院大学において開催されたキリスト教史学会東日本部会における同表題の研究発表原稿をもとに作成したものである。